

民具情報のデータベース化に関する一検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-10-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八重樫, 純樹, 吉村, 祐一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00002675

民具情報のデータベース化に関する一検討

An Examination on the Making Folk Implements Data Base

吉村祐一 (*), 八重樫純樹 (**)

(*) 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所 (**) 静岡大学情報学部

Yuichi Yoshimura (*) and Junki Yaegashi (**)

(*) Graduate School of History & Folklore Studies,

Kanagawa University Graduate School

(**) Faculty of Informatics, Shizuoka University

[要旨]

近年、博物館において収蔵資料のデータベース化が活発である。それはソフトの充実によって開発が低コストで行えるようになり、またインターネットの普及によってそれを手軽に利用できる環境が整ってきたからである。これによって大手博物館でなくとも収蔵資料の情報化ができるようになってきた。また一方で世界的に博物館資料情報の標準化を進める動きもある。このような情勢の中で、本稿は博物館資料の中の民具に焦点を当て、民具をデータベース化する際にどのような留意点があるのかを明らかにし、また国際的な博物館資料情報の標準化動向の中で民具を捉え今後の動向を考察するものである。

本稿の1. では民具を考察し、データベース化の意義と留意点を挙げた。2. では先行研究を調査し、何が問題となり、どういった課題が残されているかを考察した。3. では実際に民具データベースを構築し、留意点の実践の一例を示し、残された課題を挙げた。4. では博物館資料標準化動向と民具データベースの関係について今後の動向を考察した。そして5. で本稿を総括している。

[キーワード]

民具、データベース、ICOM-CIDOC、博物館資料、標準化

[Summary]

In recent years, the movements of informatization are active in the world of museum. This is because infrastructure of computer has developed. As a result, it has come to be able to informatize its object in case of no major museum. On the other hand, there is movement to advance the standardization of museum object information. Then, this paper considers the note when making of folk implements data base and it considers relationship between standardization trends of museum object with folk implements data base too.

In Chapter 1, it considered folk implements and give meaning of informatization of folk implements. In chapter2, it research precedence studies to consider what was discussed and what problem had been left. In chapter 3, it actually constructed data base and showed solution example. In chapter 4, it considers relationship between standardization trends of museum object with folk implements data base. In chapter5, it summarized this paper.

[Keywords] Folk Implements, Data Base, ICOM-CIDOC, Museum object, standardization

1. 民具の概要

まずはデータベース (Data Base : 以下本稿ではDBと略す) の対象となる民具について考察する。博物館資料の中で、民具は他の資料と比べ

て時代的にも地域的にも、また形状的にも用途的にも多様である。まずは民具の持つ性質を知ることが必要である。

1.1. 民具とその性質

民具とは一言で言ってしまうえば人々が生活の

必要から作り出し使用してきた道具であり、主に機械化以前の大量生産によらない道具を指す。『日本民俗大辞典』（注1）によれば、「日常生活の必要から製作・使用してきた伝承的な器具・造形物の総称」と定義される。つまり民具は有形の資料であり、また伝承的な性質をもつことから民俗資料に内包する考え方もある。

また民具と一口に言っても人間生活のあらゆる場面に関わってくる資料の総称のため非常に範囲が広い。従ってまずはどのように分類を定めるかという問題がある。

そして画一生産によらないため、たとえ同じ名称・同じ用途の資料であっても形状が異なる場合がある。それは生産・伝播の段階で異なる場合もあるし、使用者のクセや保存状況など環境によって異なる場合もある。従って情報化の際は同名の民具であっても一点ずつ情報を確認する必要がある。

1.2. 民具学とその性質

民具を研究するのが民具学であり、前述の『日本民俗大辞典』によれば「民具を研究する学問。しかし、それは単に民具だけを研究する、個々の民具を知るといふことにとどまるものではなく、(中略)民具を生活の中に正確に位置づけ、民族の生活文化・生活技術の体系を明らかにしていこうとする意図をもっている」学問である(注2)。

「民族の生活文化・生活技術の体系を明らかに」するためには民族の生活文化、即ち民俗を研究することにもつながり、民俗学とも密接な関係を持つ学問でもある。従って民具DBは民俗的側面も記録・保存する必要があり、民具そのものの情報以外にも民具が生活の中で使われた「事柄」をも記録する必要がある。

民具と民具学の定義について論を展開することは本稿の主旨ではないので引用のみに留めるが、大筋においては異論のないところであると思われる。なお、本稿では「民具資料」と表現する場合は民具そのものに加え民具の実測図、

写真、寸法などのデータ、民具台帳といった資料までを含めるものとし、「民具情報」と表現する場合はそれらの持つ資料情報を指すこととする。

1.3. 民具の内包する情報と情報化

このように民具の内包する情報を大別するとモノ情報とコト情報に分けられる。モノ情報とは資料そのものが普遍的に持つ情報であり、たとえば材質、寸法、形状などである。コト情報とは資料が使われる中で得てゆく情報であり、たとえば名称、用途、使用者などである(注3)。前者は資料そのものが持つ情報のため資料が変形しない限り保存される情報であり、後者は資料からだけでは得られない情報のため使用者や伝承者などその資料を知る人から得られる情報である。民具は人に使われることが前提の資料であるため、モノ情報とともにコト情報の採取・記録が重要になる。

そうして資料の持つ情報が台帳などによって整理され、活用できる段階までくると情報化が可能になる。つまり、資料の情報化とは既存のデータをメディアを通じて発信できる状態にすることである。逆に言えば情報化のためには情報化するためのデータが必要である。民具で言えば先のモノ情報・コト情報が引き出され、整理されていることが必要なのである。繰り返しになるが、情報化のためにはまず台帳などの「整理されたデータありき」である。

1.4. 民具研究の手法

民具研究はモノ情報による研究とコト情報による研究に大別できる。前者は比較研究などを通して一つの民具を追及する研究、後者は人の生活の中で民具を捉える研究である。生物学に例えれば、前者は人間、雀、あるいは哺乳類、鳥類といったある一つの生物についての研究であり、後者は生態系の中で一つの生物を捉える研究であるといえる。コト情報による研究をするためにはまずモノ情報による研究が進められて

いる必要があり、民具学の目的である「民族の生活文化・生活技術の体系を明らかに」するためにはどちらの研究も必要不可欠である。

モノ情報による研究は、たとえば形態などを広域調査によって比較し、その差異や共通点を基に民具を深く掘り下げ、その起源や伝播の過程を明らかにし、それを通じて民具から歴史を明らかにするという研究手法である。

そのため、この研究手法ではまず「どこの博物館に求める資料があるか」分かることが第一となる。これに対応するためには各館がDBや目録を作りインターネット等で公開することが考えられる。この作業は研究者に限らず一般利用者に向けても有益と言える。

一方、コト情報による研究は民具を知る人から聞き書きをおこなう事になる。しかし、資料についての伝承者がいない場合には資料を収集した段階の情報に頼ることになるため、資料を収集する段階でより多くのコト情報を意識して集めておく必要がある。

1.5. 民具情報のDB化の意義

このように見ると民具情報をDB化する意義は二つある。一つはインターネットなどを通じて公開し公共の益に資すること。もう一つは劣化していく民具の状態をデジタルで保存していくことである。

博物館の役割の一つに教育普及活動がある(注4)。所蔵資料を整理し、解説をつけて公開することは博物館にとっての義務である。普段はそれを展示という形で目にすることが多いが、DBもその役割を担っている。DBであれば普段は展示されない資料の情報を得ることが可能であるし、インターネットを利用すれば来館せずとも公共の財である資料情報を得ることもできる。

また、先も述べたように民具は有形資料である。有形ということはいずれ破損や劣化するということであり、永久的にその姿を留めておくことは不可能である。そこでデジタルカメラで

の撮影や、既存の写真や図をデジタルで保存することは数値によらない資料の情報を残すことが可能なのである。

2. 先行研究

これまでに民具や民俗学分野において資料のDB化の研究が行われた例がいくつかある。民具に限った例ではないが、過去の研究における着眼点や問題点を参考にするため3例を取り上げた。

2.1. 豊北町歴史民俗資料館

収蔵資料をDB化した報告書(注5)の中で吉留徹は民俗資料の情報化の課題を三点挙げている。

一つ目は民具情報の欠落である。民具というモノは残っていても、それを使用していた人が年を重ねるごとにいなくなってしまう。コト情報欠落の問題の指摘である。

二つ目はデジタル化の基準の問題である。「『何を』映像化し、保存するかという大きな枠組、明確な基準を設定し、検討する必要性を痛切に感じる」と指摘している。この問題については4章において後述するが、世界的に博物館資料の情報化の基準が提案されており、民具についてもこの基準との整合性を詰めていく必要がある。

三つ目は公開の問題である。「一つでも多くの資料が、一部の研究者だけでなく、多数の一般利用者の目に触れるよう、情報を提供することは、データ・ベースの主要な機能の一つである」と確認したうえで、「何の知識もない一般利用者が使用できるようにするためには、『閲覧・検索』システムの方法など、利用者の階層(大人、小中学生等)にあった方法が検討される必要がある」と利用者に合わせて公開の必要性を指摘している。

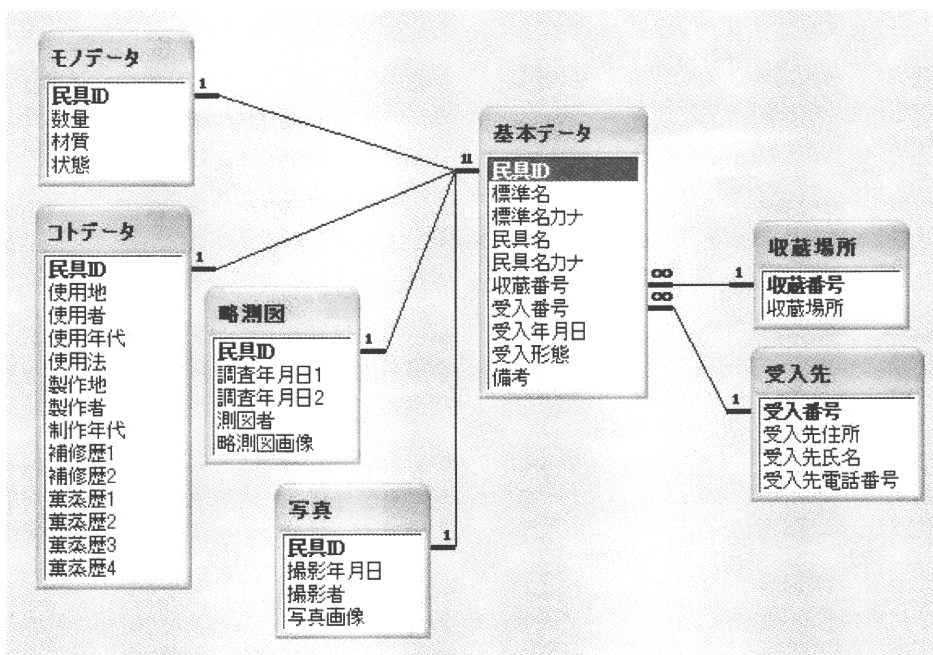


図 1 民具台帳の再構成

2.2. 民謡 DB

国立歴史民俗博物館において民謡 DB が検討された（注6）。この研究では民謡の分類について様々な検討されたが万人が納得できるものが作れず実用までは至らなかった。この結果を受けて亦野あゆみ（注7）は「データベースを作成する際には（中略）使用目的にあった形で実際のデータベース項目を決めていく方法をとるなどすれば、必ずしも分類は必要不可欠なものではない」としたうえで、分類とはデータを管理する側の問題である事、分類とはそれ自身が研究になりうるため安易に固定すべきでない事という指摘を引用した後に「データベース化と分類の問題は別々に検討すべきものである。さらに、データベースに情報を蓄積していくことによって新たな分類の方針が見えてくる、というのが理想的であろう」と指摘している。

しかし、民具のように広範囲の資料群を扱うこと、また利用者の理解の一助になることを考えるとたまかな分類は必要であると考え。また適切に正規化された DB であれば構築後も分類項目の追加や削除は可能であり、いくらかの柔軟性はある。従って暫定的でも分類を行い、整

理された形で情報発信をすべきであると考え。

2.3. 年中行事 DB

この研究の報告書（注8）にはDBの詳しい設計内容は紹介されていないものの、この研究における（1）民俗語彙の問題と（2）分類の問題を検討してみる。

(1) 民俗語彙の問題

これは要するに語彙の多様性の問題である。一つの年中行事について複数の呼称がある場合や、発音が微妙に異なる場合があり、この多様性をDBでどう扱うかという問題である。この研究においては日本民俗事典によって一般的な名称を与えたが、同時にソーラス (thesaurus: 類語辞典) の必要性を説いている。

(2) 分類の問題

この研究における分類は、資料情報を管理するというねらいで分類を設けている。しかし厳密にやろうとしても結局多様性を収めきれず、処理に迷うものや分類の階層においても錯綜してしまうため、「……それらの関係をどのように表現し、検索に役立させていくかが大きな問題となる」と課題を残している。そして、「もちろ

んこれら全ての関係を表現することは必要なく、(中略)できるだけこれらを生かすような工夫をするべきである……」としている。

この研究からは、語彙の多様性の解決はシソーラスの利用が一助になること、分類にこだわりすぎると例外を処理できないため、特に多岐にわたる民俗学資料は無理に厳密に分類する必要はない、という二点を汲み取ることができる。

3. 民具 DB 構築

3.1. 留意点のまとめ

これまでに民具資料の情報化について留意点がいくつか明らかになった。これらをまとめると表1のようになる。

表1 民具資料の情報化の留意点

情報化準備段階
<ul style="list-style-type: none"> ・まず台帳で情報を整理する ・モノ情報・コト情報の区別を明確にする ・同名の民具でもそれぞれ内包する情報は異なるため一点ごとに情報管理する ・収藏品目録を作成する
情報化段階
<ul style="list-style-type: none"> ・どのデータを情報化するか明確にする ・分類は状況に合わせて検討するが、拘りすぎではいけない ・語彙の多様性はシソーラスで補う ・公開対象の人を明確にする

留意点は情報化準備段階におけるものと情報化段階におけるものに分類できる。準備段階のものは、仮に情報化をせずとも資料管理において必要な留意点である。

3.2. 留意点の実践案

これらの留意点を踏まえ実際にDBを構築し、留意点の実践を試みた(注9)。

3.2.1 情報化準備段階の留意点

本件の場合既に民具台帳が存在し、それに

沿って情報が整理されていたため、基本的にこの台帳の項目を全てDB化することとした。本DBはRDB(Relational Data Base:関係型データベース:以下本稿ではRDBと略す)であり、DB上で台帳の項目を再構成し、モノ情報・コト情報など項目ごとのまとまりをはっきりさせるようにし、民具一点ごとに情報を管理することとした。これによって同名の民具であってもそれらは別々の民具の情報として認識される(図1)。また本DBにはどのような民具がどれだけ収蔵されているかを明らかにするためDBとは別に収藏品目録を作成した。これによって利用者の「どこに何があるか」という要求に応えるようにした。

3.2.2 情報化段階の留意点

分類とDB構築は別問題であるという指摘があるが、分類を全く用いないのは不便であるし、分類は未知の民具の理解を助ける意味もある。

表2 機能分類項目

1	捕る(漁獵用具)
2	飼う(畜産用具)
3	飼う(養蚕用具)
4	耕す(農耕用具)
5	こなす(脱穀調整・食料加工用具)
6	かしぐ(煮焼蒸用具)
7	食べる(食料調理・食用具)
8	蓄える(容器・包装用具)
9	運ぶ(運搬・交通用具)
10	住まう(住用具)
11	ともす・あたためる(灯火・暖房用具)
12	身につける(着用具)
13	よそおう(容姿用具)
14	紡ぐ・染める・織る(紡織用具)
15	切る(切截用具)
16	つくる(加工用具)
17	計る(計量用具)
18	伝える(意思伝達用具)
19	遊ぶ・楽しむ(玩具・遊戯・娯楽用具)
20	祈る・まじなう(信仰呪術用具)

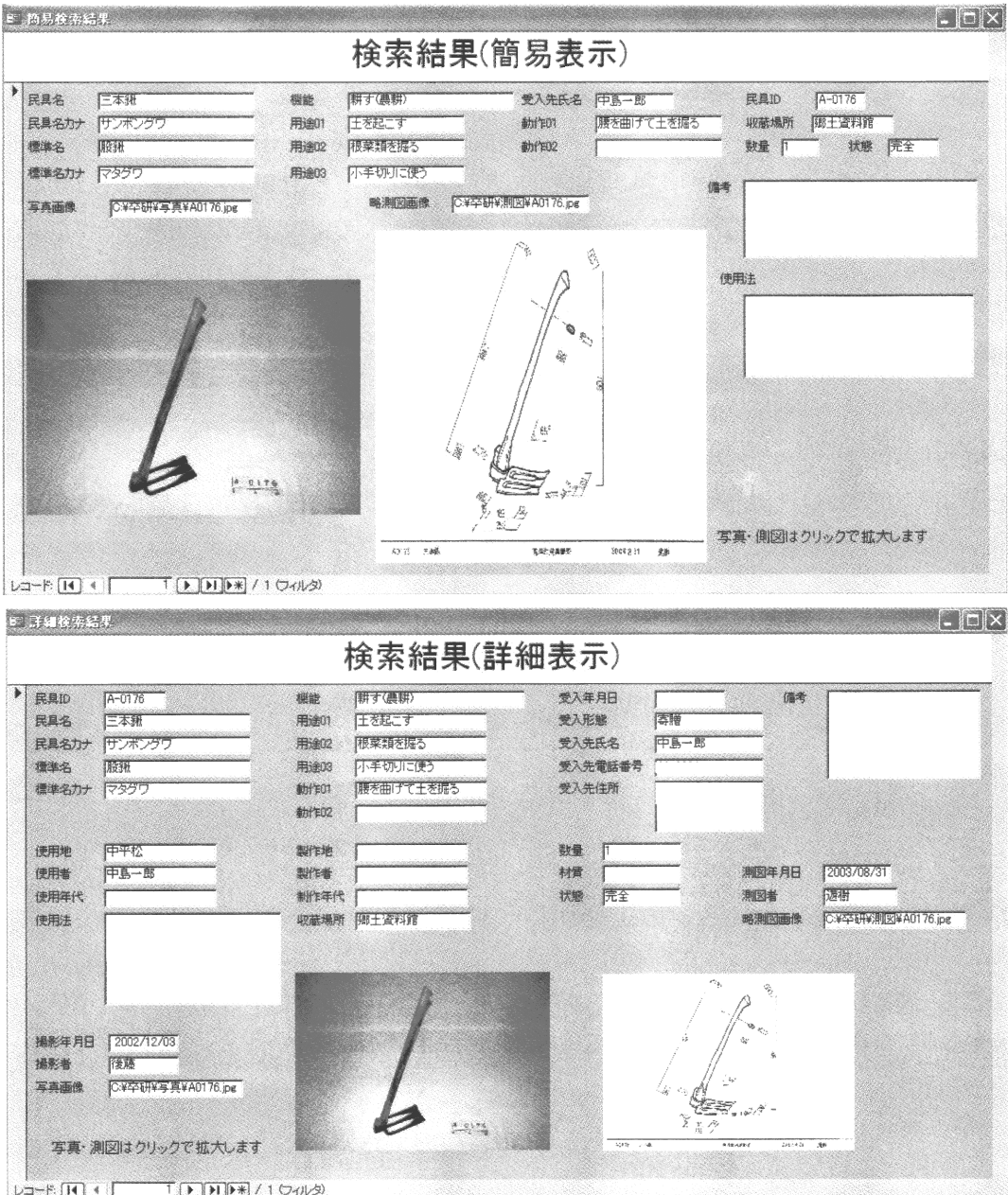


図2 利用画面の例

そこで本DBでは宮本常一の機能分類(注10)を用いた(表2)。また理解をより助けるため民具について詳細な動作を記録する欄を設け機能分類を補っている。

但しこの分類はあくまで本DB上における利用者の理解を助けるための便宜的な分類であり、本DBに納められている民具の分類を恒久的に

定めたものではない。研究者が必要と感じれば別の分類を当てはめて各自の研究を進めるのが望ましい。

語彙については当地域での呼称に加え、一般語彙の併記という意味で「日本民具辞典」に同一の民具の名称があるものについては「標準名」として併記した。そして、研究者や台帳情報を全て見たい利用者用と、最低限の情報を知れた

表 3 MICMOの項目 (参考文献 11 より)

分野	項目	
目録記入	1 組織名	Institution name
	2 資料同定番号	Object identification number
	3 資料分類	Object category
	4 資料名	Object name
	5 収蔵場所	Location
	6 受入情報	Acquisition information
	7 資料構成数	Number of parts or components
	8 資料タイトル	Object title
	9 記録情報	Record information
物理的記述	10 法量	Measurements
	11 素材・材質	Materials
	12 技術	Techniques
	13 記号・刻印	Marks and inscriptions
	14 主題	Subjects, contents, Iconographical, keywords
	15 状態	Condition
	16 画像	Image
内容に関する情報	17 原作	Origins

い一般の利用者用にインタフェイスレベルで閲覧できる項目を設定し対応することとした(図2)。図2は上が最低限の簡易表示、下が台帳全ての項目の詳細表示の例である。

3.3. 残された問題点

留意点についての実践案を提示したが、まだ解決しきれていない問題が残されている。分類と語彙の問題である。これらの問題は2章で述べた民具の「人間の生活全般に関わる資料のため広範囲にわたる」という性質に起因するものであり、民具を扱う上では避けて通れない問題である。

分類については普遍的な項目を作ろうとすると地域の特徴が見えにくくなり、地域に特化した分類を作ろうとすると普遍化できないというジレンマが見られる。現状は、機能分類や用途分類を参考に地域に即した分類を採用しているところが多いようであるが、民具学界全体で考えたときに分類項目がバラバラになり不便が生

じる。

またDB単体で多様な語彙を一度に扱うことは難しく、指摘どおりシソーラスとの併用が望ましいと考えるが、そのためにはシソーラスの開発研究を待たねばならない。

4. 博物館資料情報化の世界標準と民具DB

4.1. ICOM-CIDOCの博物館資料情報化動向

世界の博物館資料の情報化動向に目を向けてみるとICOM(International Council of Museum: 国際博物館会議)の国際的な委員会であるCIDOC(International Committee for Documentation: 国際ドキュメンテーション委員会)(注11)が取り上げられる。この他にも英国のMDA(Museums Documentation Association: 博物館ドキュメンテーション協会)(注12)やカナダのCHIN(Canadian Heritage Information

表 4 民具台帳の例

分野	項目	分類	項目
番号	分類番号など	製作	対価/仕入先
調査地	住所		製作者/製作時間/製作用具
名称	名称 別名 部分名		縦×横×高/長径×短径×高 柄角/重さ
用途	使用目的 使い方 効用 仕事時間/仕事量 使用年代 使用者の職業/氏名/年齢/性別	材料	材料名/材料産地 材料の処理法
		分布	住所
		由来変遷	由来伝説/禁忌・俗信云い伝え
		写真	調査年月日
			写真番号
入手経路	借用/購入/譲/自製/もらう	談話者職業/氏名/年齢/性別	調査者氏名/所属

network：カナダ文化財情報ネットワーク）（注13）など自国で博物館資料情報化の標準項目を提唱している国もあるが、本稿では国際機関であるICOM-CIDOCについて取り上げる。

CIDOCによる資料標準化の動きの一つにMICMO (Minimum Information Categories for Museum Objects: 博物館資料の最小情報分類)がある。これは、「1994年8月ワシントンにて行われた国際会議の場で提唱され」「博物館の規模や種類に関わらず、将来ネットワーク化の促進の際に、互いの基本的な共通認識としてデータ項目を規定しておくべきだと考えられ」たものである（注14）（表3）。

「最小限情報」と銘打たれているのは「この項目だけについて情報を集めればよい」という意味ではなく、「これは情報を集めるべき最小限の項目であり、この項目に加えて各館が独自の項目を設ける」という意味である。そしてこのMICMOは項目を規定したものであり、項目内の記述形式を規定したのではない。

また、博物館の持つ資料情報を意味でもって結び付けていくCRM (Conceptual Reference Model: 以下本稿ではCRMと略す) という標準も進められている。これはRDBに替わるオントロジー (Ontology) による情報化の手法であり、

既存DBのスキーマにとらわれないため、横断的利用が期待されている。現在は実装にむけての研究が進められている。（注15）

DBでMICMOのようなメタデータ (Meta Data: データ検索のためのデータ) 記述を実現する方法としては、XML (eXtensible Markup Language) (注16) やRDF (Resource Description Framework) (注17) を用いてプログラムを組む手法がある。そして、将来的にはネットワークを利用してメタデータ記述によるDB情報の横断的利用が期待されている。

4.2. 民具DBとの整合性

MICMOの項目は博物館資料全般について提唱されたものである。これを博物館資料たる民具に照らし合わせてその整合性を考察する。

（表4）は神奈川大学日本常民文化研究所における民具台帳の項目である。民具台帳は各博物館や研究所によって異なるが、名称、採取地、素材…といった基本項目については大同小異であると考えてよい。

MICMOと民具台帳を比較すると、MICMOの4, 10, 11などは民具のモノ情報に相当し、6, 12, 13などはコト情報に相当する。また民具には欠かせない16, 画像もあり、モノ情報・コト情報

をはっきり認識した上で当てはめれば博物館資料たる民具の最小限情報分類としても妥当と考えられる。

しかし、MICMOに対応するにしても分類や語彙の問題は依然残されたままである。むしろこれらの問題を解決してからMICMOへの対応を検討するのが手順である。例えば4、資料名に標準名を当てはめると地方名で検索ができないし、逆もしかりである。またこの台帳ではMICMOの7、15に対応する項目が無いのも問題である。

今後の民具DBの動向としては、まず最低限MICMOに対応した項目を入れること、その上でメタデータ記述によってネットワーク上での横断利用に対応してゆくことが望ましいと考える。

5. まとめ

以上、民具情報のDB化についての留意点とその解決案、そして国際的な博物館資料の情報化動向について述べた。本稿において民具の情報化、特にDB化についてその留意点と実践案の一例を提示できたと考える。しかし、分類の問題はいずれ何らかの解決をしなければならず、語彙の問題はシソーラスの開発研究が課題として残っている。

DBを構築した次の段階として情報の検索、即ち情報の共有がある。従ってこれからのDBは情報の共有を視野に入れる必要がある。さし当たってはMICMOのような国際的なメタデータ標準に対応していくこと、そして将来的にはCRMのようなオントロジーモデルにも対応してゆけるような姿勢が求められるだろう。CRMは現在まだ研究段階であり、実装に向けての項目名などはこれからの研究課題である。その際には既存のメタデータ規格が参考になると考える。

これからの民具資料のDB化には民具学からの視点、博物館からの視点、情報学からの視点といった複合的な視点で考えてゆくことが必要である。これまでも国立歴史民俗博物館（注18）や神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科

（注19）などで民具学、博物館学、情報学などで学際的に研究を行った例がある。今後はこの路線をさらに進めて多角的に研究していくことが望ましいと考える。

付記

本稿の竜洋町民具台帳の整理は竜洋町教育委員会竜洋町史編さん室と静岡県立掛川西高校教諭（2004年当時）の中山正典先生が中心となつて行われたものであります。貴重な資料を快くお貸し下さり、また論文作成に際し大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

[注]

1. 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館 2000年 634項
2. 注1に同じ、636～637項
3. 柏村祐司「民具研究と博物館」歴史と民俗 神奈川大学日本常民文化研究所論集13 平凡社 1996年 35項
4. 博物館法第二条による
5. 1997年に同館による民具資料を中心とした収蔵資料のDB化プロジェクトがおこなわれた。報告は吉留徹「民俗資料の映像化とデジタル・アーカイブの課題—豊北町歴史民俗資料館民俗資料映像データ・ベースの事例を通して—」民具マンスリー第36巻8号 神奈川大学日本常民文化研究所 2003年
6. 国立歴史民俗博物館を中心に各分野から研究者を集めてプロジェクトチームを編成し、日本の民謡の分類法とデータベース化の研究を行ったもので1989年に報告書が出されている。小島美子代表『民謡の分類法とそのデータベース化に関する総合的研究』国立歴史民俗博物館 1989年
7. 亦野あゆみ「民俗資料のデータベース化に

関する基礎研究」神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科修士論文 1997年

8. 新潟県朝日村と千葉県袖ヶ浦町における一年間の年中行事を民俗調査し、その資料を実際にDB化したものである。松本浩一・古家信平「民俗資料データベース化の試み一年中行事資料を中心として」人文科学とコンピュータ 6-1 情報処理学会 1990年
9. 本DBは静岡県磐田市(旧磐田郡竜洋町)における民具資料をDB化したものである。民具の選考については竜洋町教育委員会竜洋町史編さん室(2004年当時)において過去に民具調査が行われ、2000点強の民具台帳ができていたためそれを基にした。ただし民具台帳に付記されている情報は少なく、聞き書き調査でできる限り情報を補い、主に農業に関する民具を中心に456点の民具台帳をDB化した。開発環境は以下のとおりである。

OS: Microsoft Windows Millennium Edition
データベースソフト: Microsoft Access2000

10. 宮本の機能分類は人間の動作に着目し、民具を20のカテゴリに分類したものである。民具の用途ではなく、人間の動作に主眼が置かれているため、未知の民具でもその働きを直感的に理解しやすい。宮本常一『民具学の提唱』未来社 1979年 164～202項
11. CIDOC
<http://www.willpowerinfo.myby.co.uk/cidoc/>
国際博物館会議
<http://www.museum.or.jp/icom-J/>
12. MDA
<http://www.mda.org.uk/>
13. CHIN
<http://www.chin.gc.ca/>
14. 和久田聖衣・八重樫純樹「デジタルアーカイブの調査研究 —博物館情報の標準化動向を中心として—」情報学研究第10巻 静岡大学情報学部 2004年 128項
15. 村田良二「CIDOC CRMによるデータモデリ

ング」アート・ドキュメンテーション研究 NO.11 アート・ドキュメンテーション学会 2004年など

16. W3C (World Wide Web Consortium) によって勧告されたマークアップ言語のためのルールセット。
17. W3Cによって勧告された資源記述のための枠組み。
18. 国立歴史民俗博物館研究報告第30集 共同研究「歴史研究支援情報処理の研究—画像データを中心にして—」国立歴史民俗博物館 1991年など
19. 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」2003年～

【参考文献】

1. 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込陸子・渡邊欣雄編『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館 2000年
2. 日本民具学会編著『日本民具辞典』株式会社ぎょうせい 1997年
3. 宮本常一『民具学の提唱』未来社 1979年
4. 嘉村哲郎「博物館・美術館を中心とした収蔵品情報の横断的利用の考察—CIDOC CRMの適用からセマンティックwebへの展望」—アート・ドキュメンテーション学会第16回年次大会予稿集 アート・ドキュメンテーション学会 2005年
5. 坂井知志・高橋信裕・高安礼士・武田国夫・水嶋英治・八重樫純樹共著・編『博物館情報論』樹村房 1999年
6. 柏村祐司「民具研究と博物館」歴史と民俗 神奈川大学日本常民文化研究所論集13 平凡社 1996年
7. 吉留徹「民俗資料の映像化とデジタル・アーカイブの課題—豊北町歴史民俗資料館民俗資料映像データベースの事例を通して—」民具マンスリー第36巻8号 神奈川大学日

- 本常民文化研究所 2003年
8. 小島美子代表『民謡の分類法とそのデータベース化に関する総合的研究』国立歴史民俗博物館 1989年
 9. 亦野あゆみ「民俗資料のデータベース化に関する基礎研究」神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科修士論文 1997年
 10. 松本浩一・古家信平「民俗資料データベース化の試み—年中行事資料を中心として—」人文科学とコンピュータ6-1 情報処理学会 1990年
 11. 和久田聖衣・八重樫純樹「デジタルアーカイブの調査研究 —博物館情報の標準化動向を中心に—」情報学研究第10巻 静岡大学情報学部 2004年
 12. 村田良二「CIDOC CRMによるデータモデリング」アート・ドキュメンテーション研究 NO.11 アート・ドキュメンテーション学会 2004年
 13. ICOM CIDOC 編 鯨井秀伸編訳『アート・ドキュメンテーション叢書Ⅰ 文化遺産情報のData ModelとCRM』勉誠出版 2003年
 14. E. Orna & Ch. Pettitt 著 安澤秀一監修 水嶋英治編訳『アート・ドキュメンテーション叢書Ⅱ 博物館情報学入門』勉誠出版 2003年